

運動文化研究

40

2023 Vol.40

主要目次

【巻頭言】私たちはなぜ今、学校体育研究同志会に「つどい・学ぶのか」
—今、同志会研究・運動を深め・広げることの意味— 澤 豊治

特集1 部活動の地域移行について

部活動の地域移行と地域スポーツ振興策の現状と課題 青沼裕之

運動文化論と運動部活動 —学校体育研究同志会における教科外体育・課外体育の議論— 神谷 拓

労働問題としての部活動の課題 渡辺孝之

部活動地域移行 地域からのアプローチ —浜松市を例に— 大野木龍太郎

特集2 長編実践記録（夏大会・注目の実践）

運動会における主体的活動（自治）の可視化 堀江なつ子

ネイスミスルールから自分たちのルール作りへ 山口紋佳

—子どもたちが本音で語り合い、ルールをつくりかえていく小5バスケットボール実践—

投稿論文

【研究論文】教職課程で学ぶ学生の認識の変容を目指した修士論文 松尾 誠

【実践論文】子どもたちの生活に寄り添ったカリキュラムの開発 久我隆一

—学習集団の質の高まりと素材選択との関連に焦点を当てて—

全国研究大会報告

学会・研究集会報告

「たのしい体育・スポーツ」発行状況（2022年夏号～2023年春号）

学校体育研究同志会研究年報

CULTURA MOTUS

The Study of Sports, Physical and Health Education

Contents 2023

Vol.40

The Opening Article

Why are we now gathering and learning to Gakkotaiiku-Kenkyu-Doshikai?

Toyoharu Sawa

Special Theme I: About Transition of Club Activities to Regional Areas

Transition of Club Activities to Regional Areas and Current Status and Issues of Regional Sports Promotion Policies

Hiroyuki Aonuma

Relationship between Theory of Motor Culture and Extracurricular Sports Activities

Taku Kamiya

Club Activities as a Labor Issue

Takayuki Watanabe

Transition of Club Activities to Regional Areas: Some Approaches from Hamamatsu regional Area

Ryutaro Onogi

Special Theme II: Instructional Practice Reports: Notable Practice Reports in Summer Conference

Visualization of Autonomous Activities in a Sports Festival

Natsuko Horie

Starting with the Naismith's Rule and Creating Our Own Rules

Ayaka Yamaguchi

Articles

Understanding the Need for Classes that Value Mutual Teaching and Learning: Changing the Consciousness of University Students Aiming to Become Health and Physical Education Teachers

Makoto Matsuo

Developing a Curriculum that snuggle up the Lives of Children

Ryuichi Kuga

巻 頭 言

私たちはなぜ今、学校体育研究同志会に 「つどい・学ぶのか」

—今、同志会研究・運動を深め・広げることの意味—

澤 豊治

(滋賀・全国常任委員長)

いったいこれから どんな世界になっていくのだろう

今日も遠くウクライナでは罪もない命が何千と失われていっています。アフリカの少なくない国では子ども達が病気と飢えにさらされています。シリアでは震災の支援の手が十分届いてないと聞きます。アジアでもミャンマーの軍事政権の蛮行、中国の覇権主義的な動き…心痛むニュースが続きます。

我が国はどうでしょう。昨日こんなニュースに目がとまりました。東日本大震災で、避難生活を強いられた女性（68歳）。津波で自宅を流され、東京都目黒区から共同住宅への避難を提案された。喜んで夫と移り住んだが、住宅支援の打ち切りになり夫も間もなく病死。一人になった彼女に目黒区は部屋の使用料相当額を請求する訴訟を起こした。その額は約820万円にまで膨らんでいる。彼女は今こう語った。「もう一度被災したよう」

そんな国民が数多くいる中で国民の安全と命を守ると言い沖縄県民の総意を蹂躪し進められる辺野古基地問題。加えて中国、北朝鮮らの脅威から国を守ると今後5年間で43兆円の防衛費（＝軍事費）拡大を閣議決定する。

はたまた何の「レガシー」を残したのかわからない、今ではあったのか無かったのかさえも忘れかけ、残った「遺産」は汚職まみれの「東京

2020オリンピック」ゴリ押し開催。スポーツに関わる者として申し訳ないが、今回のオリンピックほど選手の名前の一つも思い出せない興味の無いオリンピックは記憶にありません。自分がこんな輩が蔓延り、先述のように未だに震災で苦しんでいる女性がいる国の国民であることに本当に胸が苦しくなりいたたまれない気持ちになってしまうのです。

教育を取り巻く情勢を見てみましょう。毎日のように起こるいじめや不登校の問題。教職員不足問題、すすまぬ教員の働き方改革問題。部活動の地域移行問題もやってます感を演出するためだけで、現場のことなどお構いなし。ついた国家予算は28億円。48兆円の何分の一だ？あとは地域丸投げと、スポーツビジネスの餌食にして知らん顔をするつもりなのでしょう。

これだけ弱者をいじめ倒し格差を広げた社会。子ども達にどんな道徳や生き方をせよと教えろと言うのでしょうか。これから世界も、日本もいったいどうなっていくのでしょうか。やるせない失望感と不安に気持ちが思わず塞いでしまいそうになります。

40年間教育に携わり感じていること

政府高官や、御用学者が言う難しいこと（そう言い回すこと）は私にはわかりません。いや、わかりたくありません。私はこの40年間純粋に憲

〔巻頭言〕 私たちはなぜ今、学校体育研究同志会に「つどい・学ぶのか」（澤 豊治）

法、教育基本法に込められた人々の思いや願いを受け継ぎその理想とする国づくりのための教育をしようとする仲間と歩んできたと自負しています。訳の分からぬ屁理屈で人々を惑わすような教育、勝ち組、負け組をつくるような教育には決して与してこなかったそれも誇りです。そんな体育教員にこんな私をしてくれたのが間違いなく体育同志会の研究とその仲間達でした。だからどうしてもこの同志会をもう少しの間守り育てしっかりと次の世代につなぎたいのです。大袈裟なようですがそうでないと私なりの体育教員として生きた意味がなくなるとさえ思うからです。

しかし、そう言いながら今の世の中を見てみると本当に私たちの教育は成果を上げ、意味があったのだろうかとしばしと考えてしまうときがあります。我々の教育にける思いをこのまま無責任に若い教員に押しつけていいのかと躊躇してしまいそうになります。なぜならこんな世の中になるはずじゃなかったのにと落ち込み思わずため息をついてしまう今の自分がいるからです。この40年間の私の教員としてやってきたことは、本当に無駄ではなかったのでしょうか…

ホンナわけあるかい！

近視眼的に世の中を見ればこのような考えになってしまいます。しかし歴史は必ず弁証法的に進化しています。同じことを繰り返しているようですが、決して同じではない。必ず進歩しながら歴史は進んでいます。今大切なことはその歴史の中に私たちの足跡をどう刻むかということ。一見すると劣勢に立ち世の中も後退しているように見え、諦めにも見える社会の矛盾や不満は間違いなく勢いを増しながら増幅しています。いつの世も歴史が動くときの決定的なエネルギーは必ずこの名も無き人々達のエネルギーなのです。私たちがやってきたことは、その矛盾や怒りのエネルギーが結集するための勇気と知恵の道筋を示す取り組

みに違いありません。私はそう信じています。だからここで敗北主義に陥らず私たちの研究や運動はムダだった…「ホンナわけあるかい！」そう言い放ちたいのです。

ホナこれからどうしますの？

では何から始めたらいいのでしょうか。ここに来て教員と保健体育教員の役割を今一度考えることが大事だと思います。まず私たち教員忘れてはならないこととは何でしょうか。私が考えていることをいくつか上げてみたいと思います。まず一つ目は、常に思慮深く何事も一度は疑う姿勢を忘れないこと。自らの頭で考えずときの体制から言われた教育を垂れ流し的にしてしまう教員になってしまわぬこと。二つ目は、学校の主人公はあくまでも子ども達であるということ。教育活動の全てはすべての子ども達の幸せな未来につながるための営みであることを絶対に忘れずそれにつながるには絶対与しないこと（「憲法」「旧教育基本法」の理念をしっかりと学ぶこと＝主体者を育てる。国のために役に立つ人をつくるのではない）。三つ目は、「寛容」であること。子どもはもとより仲間にも結果や責任を追及しすぎないこと。余りに現代社会は「不寛容」過ぎます。自分や他者を未熟なものとして受け入れともに生きるという寛容さが特に教員には必要だと考えます。

次に私たち体育に関わる者に関わることです。これは私の身近に感じていることですのですべての体育に関わる教員に当てはまることでは無いかもしれませんが、体育という教科の意義をもっと自覚し体育教員としての真のアイデンティティーを確立することです。「体育教員の脳みそは筋肉でできている」と揶揄されそれに甘んじていいのかということです。言い返せる知識と実践を研究しているかということです。日本の学校体育の歴史と役割は、旧態依然とした生徒指導や生徒管理の下請けと、せいぜい楽しみながら身体を鍛

〔巻頭言〕 私たちはなぜ今、学校体育研究同志会に「つどい・学ぶのか」（澤 豊治）

える程度にしか未だに受け入れられていないことから私たち自身が目を背けないことなのです。このことについてもう少し詳しく述べたいと思います。今同志会内において大事なことは、現場の実践と同志会の運動文化研究をより強くつないでいくことです。同志会の研究活動の宝は研究と現場が乖離してこなかったことです。互いが尊重することは当然のことですが、もう一步踏み込んで言うなら昨今の同志会の学習会はスマートすぎるのではないのでしょうか。遠慮せず自分の考えや思いをもっと激しくぶつけ合っていると思うのです。遠慮したり相手のことを考えすぎたり、ときに自らが傷つきたくないばかりに参加はしているけど何も自分の意見や考えを主張していないことはないのでしょうか？

私はこの運動文化研究誌についても心待ちにしている現場教員が何人おられるのか正直懐疑的です。私がここで言いたいことは、この『運動文化研究』や『たのスポ』を楽しみにし、これを元に語り合える体育教員集団をつくるための編集局、全国、支部であらゆる努力が今必要だということです。ただ何となく同志会員で、ただ何となく『たのスポ』を購読しているだけでは自らの気持ちは納得させられたとしても子ども達に本当に責任を持った教員にはなれないのではないのでしょうか。まずはみんなが今何が大切なのか自らしっかり考え、積極的な行動をすることが求められていると思うのです。

同志会の今後の課題

久保健は「運動文化研究」37号巻頭言で次のように同志会の「継承・発展」の緊急課題を提起しています。^{*1)}

一つ目は、「運動文化論」の継承・発展です。「技術指導の系統性研究」「異質共同の学習集団論」を民主的、自治的集団づくりの大きな構想として再構築する必要性。

二つ目は、会自体の組織の継承・発展についてです。久保は、会の先達たちが築いてきた実践と研究の財産は膨大であり、それを継承することはたやすいことではない。と述べた上で、それでも会の実践と理論（運動文化論）を、ただ学び、受け継ぐだけでなく、創造的・発展的に継承することが求められていると述べています。

やはり現在ここにこそ会の総力を挙げて注力すべきではないでしょうか。そのためには、実践と研究を双方向で追求し、現場教員と研究者が今一度会の伝統的研究スタイルと自らの使命を自覚することが大切です。具体的に言うと教育現場では、回りの教員仲間にとえどんな拙い授業でも自らの授業を見てもらうような実践を広げ、研究者は、もっと積極的に学会に研究成果を発信する。その方向性が今大事だと感じています。

今こそみんなで「ケサラ」の大合唱を

私は、夏の全国大会「文化交流の夕べ」のフィナーレで全国の仲間と肩を組み合い歌う「ケサラ」の大合唱が大好きです。いくつになっても胸が熱くなります。今の予定で行けば今年の知多美浜大会ではまた皆さんと肩組み合って歌うことができそうです。でも、この力と感動こそが今最も私たちに大切だと感じています。

忙しい、本当に忙しい日々の連続で挫けそうになるときもあるでしょう。でも、志を同じくする仲間がいて明日の希望の光が少しでも見えれば必ず自分の納得できる人生があなたを待っています。

さあ、しっかり遠く未来の水平線を見つめ仲間や子ども達の手を握って離さず「ケサラ」をみんなで歌いながら確かな歴史的一步を踏み出していきます。

*1) 久保健（2020）運動文化研究 Vol.37 pp.2-3

目次

巻頭言：私たちはなぜ今、学校体育研究同志会に「つどい・学ぶのか」（澤 豊治）.....	3
—今、同志会研究・運動を深め・広げることの意味—	

特集1 部活動の地域移行について

部活動の地域移行と地域スポーツ振興策の現状と課題（青沼裕之）.....	7
運動文化論と運動部活動 一学校体育研究同志会における教科外体育・課外体育の議論—（神谷 拓）.....	15
労働問題としての部活動の課題（渡辺孝之）.....	24
部活動地域移行 地域からのアプローチ 一浜松市を例に—（大野木龍太郎）.....	33

特集2 長編実践記録(夏大会・注目の実践)

運動会における主体的活動(自治)の可視化（堀江なつ子）.....	44
ネイスミスルールから自分たちのルール作りへ（山口紋佳）.....	53
—子どもたちが本音で語り合い、ルールをつくりかえていく小5バスケットボール実践—	

投稿論文

[研究論文] 教職課程で学ぶ学生の認識の変容を目指した修士論文（松尾 誠）.....	62
[実践論文] 子どもたちの生活に寄り添ったカリキュラムの開発（久我隆一）.....	71
—学習集団の質の高まりと素材選択との関連に焦点を当てて—	

2023年同志会・春の学校まとめ（制野俊弘）.....	83
2022第164回学校体育研究同志会 全国研究大会・武蔵野大会分科会のまとめ.....	92
2022冬大会in神戸のまとめ.....	109

学会・研究集会報告

日本体育科教育学会報告（澤 豊治）.....	114
日本スポーツ教育学会第42回学会大会報告（松尾 誠）.....	115
教育研究全国集会2022報告（石田智巳）.....	116

「たのしい体育・スポーツ」発行状況(2022年夏号～2023年春号)（たのしい体育・スポーツ編集委員会）.....	117
2021年度(2021/08～2022/07) 学校体育研究同志会決算（全国事務局）.....	120
編集後記／奥付.....	121